赤壁帖

特260
156

始

特26
156

赤壁帖

後赤壁賦

是歲十月之望步自雪堂將歸于臨皐二客從予過黃泥之坂

霜露既降木葉盡脫人影在地仰見明月顧而樂之行歌相答已而歎曰有客無酒

有酒無肴月白風清
如此良夜何客曰今
者薄暮舉網得魚巨
口細鱗狀如松江之
鱸顧安所得酒乎歸
而謀諸婦婦曰我有
斗酒藏之久矣以待
子不時之需於是携

酒與魚復遊於赤壁
之下江流有聲斷岸
千尺山高月小水落
石出曽日月之幾何

而江山不可復識矣
予乃攝衣而上履巉巖
披蒙茸踞虎豹登
虬龍攀棲鶻之危巢

俯馮夷之幽宮蓋二
客不能從焉劃然長
嘯草木震動山鳴谷
應風起水涌予亦悄
然而悲肅然而恐凜乎
其不可留也反而登舟
放乎中流聽其所止而
休焉時夜將半四顧寂

寥適有孤鶴横江東來翅如車輪玄裳縞衣戛然長鳴掠予舟而西也須臾客玄予亦就睡夢

一道士羽衣翩躚過臨皐之下揖予而言曰赤壁之遊樂乎問其姓名俯而不答嗚呼噫嘻我

知之矣疇昔之夜飛鳴
而過我者非子也耶道
士顧笑予亦驚悟開戶
視之不見其處

後赤壁賦

是歲十月之望步自雪堂
將歸于臨皋二客從予過
黃泥之坂霜露既降木葉盡
脫人影在地仰見明月顧而

樂之所發者已而歎曰客
亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者
如彼而卒莫消長也蓋將自其變者而觀之則天地
曾不能以一瞬自其不變者而觀之則物與我皆無盡
也而又何羨乎且夫天地之間物各有主苟非吾之所
有雖一毫而莫取惟江上之清風與山間之明月耳
得之而爲聲遇之而成色取無禁用無盡
是造物者之無盡藏也而吾與子之所共適

客喜而笑洗盞更酌肴核既盡杯盤狼藉相與枕藉乎舟中不知東方之既白

蘇軾赤壁賦

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟遊於赤壁之下清風徐來水波不興舉酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章少頃月出於東山之上徘徊於斗牛之間白露橫江水光接天縱一葦之所如凌萬頃之茫然浩浩乎如馮虛御風而不知其所止飄飄乎如遺世獨立羽化而登仙

河而江山之濆後臺亭乃
扶衣而上蹬巉巖披叢蓊
蹠虎豹坐軋然聲榜響之
危巢俯冷岸幽室蓋二室
之狀從穹窿然長嘯草木

震動山鳴若應風起水湧
亭亦悄然而悲寂寥然而恐深
林幽之獨也反而坐乎枝
乎中深聽之而心而休有時
夜月半四顧穹窿適有孤

鶴樸江東來翅如車輪言裳
紛衣戛然長鳴掃手永而西
也行吏家吉手而敲睡夢
一爲士羽衣翩躚乙法皐乙
下摛手而言曰赤壁乙遊乎

乎問主姓名俯而不答嗚呼
嘻嘻彭吉之蓋瞞者之狀
乎嗚而已彭吉抵子也耶
道士彭笑手而鬱怪開左祝
之示尺主賣

前赤壁賦

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟遊於赤壁之下清風徐來水波不興舉酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章少焉

月出於東山之上徘徊於斗牛之間白露橫江水光接天縱一葦之所如凌萬頃之茫然浩浩乎如馮虛御風而不知其所止飄飄乎如遺世獨立羽

化而登僊於是飲酒樂甚扣
舷而歌之歌曰桂棹兮蘭槳
擊空明兮泝流光渺渺兮予懷
望美人兮天一方客有吹洞
簫者倚歌而和之其聲嗚嗚

然如怨如慕如泣如訴餘音
嫋嫋不絕如縷舞幽壑之潛
蛟泣孤舟之嫠婦蘇子愀然
正襟危坐而問客曰何為其
然也客曰月明星稀烏鵲南

飛此非曹丕之德之詩乎西望
夏口東望武昌山川相繆鬱
乎蒼蒼此非孟德之困於周
郎者乎方其破荆州下江陵
順流而東也舳艫千里旌旆

蔽空釃酒臨江横槊賦詩固
一世之雄也而今安在哉況
吾與子漁樵於江渚之上侶
魚虾而友麋鹿駕一葉之扁
舟舉匏樽以相屬寄蜉蝣

於天地渺滄海之一粟哀吳
生之須臾羨長江之無窮挾
飛仙以遨遊抱明月而長終
知不可乎驟得托遺響於悲
風蘇子曰客亦知夫水與月

乎逝者如斯而未嘗往也盈
虛者如彼而卒莫消長也蓋
將自其變者而觀之則天地
曾不能以一瞬自其不變者
而觀之則物與我皆無盡也

而又何羨乎且夫天地之間
物各有主苟非吾之所有雖
一毫而莫取惟江上之清風
與山間之明月耳得之而為
聲目遇之而成色取之無禁

用之不竭是造物者之無盡藏
也而吾與子之所共適客
喜而笑洗盞更酌肴核既盡
杯盤狼藉相與枕藉乎舟中
不知東方之既白

赤壁怪を津歩　俳諧蹊

七月望の夕さり友どもと船を浮
べて桂より大堰川のぼる時吹く風
を涼しきものから立つ波もなく杯
を乗せてまろびどにまろめるがごと

青柳をうたいたるにより て百年死数の
ぬ者てふ人のさは却むの苔を那ゝ作
まかれふくきひの中ゝ山おひよ都ち
ほうたふのはのおとはさや寒さ
みまさのやくものさらやまさらに

和の花はうてしよりはる代まてふ
天をおきくあてし心をわのもたる
まをのまはやまをみもこ雪ん舞
波歳のこれもかのもに新たあれと
きみの花のけふ小まをみたなし

はるをれの峯のこゑみちはおちつる
志ろこしらぬもなを庵このすもも
雪ふの林を林こ山志吹く風を
ひとふもかもやこゑはるやを
ちをやふるうをれまつりのひの小松

前代ふるも主樓無垂波羅く
子業まくかきれるまつも今日よりは
きみふひのれくよろはよや風雅
英詩のおもにてる月なみをうそれを
うまひりあきの最中なり者ふ

よきひせりときゆるは源帥若
うにあらずや白河院この川ふ
御幸まくく唐歌やまとうた
絲竹のみちの御船遊ひ強ひく
各〻主の業に堪てる人を舟を

かちて急ぎさせまゐらせ源帥
後まうくまゐり岸小舘はきく
いばれる若舟にまれよ勢多へ
招うまゐらせたりこのざえまた
多くあらぐを主の人いまはば

うにあるべの海にて君と我と今日
たの逢ひまゐらをいはまぐありと
教むべき身我死なば藥を主
の御道なく充いせぬ水も君のみ流
まぬさは心のなげきを聲にもら

ものみおのれいまだ用ゐこの用と為
さんを乃よりくさのものこころばせきき
を未ぶゆの為に新くるものを
うの為ごときも養ふることなし又
かたちふを以て天地も目渡る

ものこころばせあるべ
変らぬをいへば物と動とまさ紀
ぶるのたゆまざるが如くも
うらや英ん抑天地のあたへ
物皆あるべあり無ぶの物ふしあら

さはる塵たりも所なう空なる
心地さへ波よせる風の清らに
雲もさたらぬ清きあき耳ふ
よりて目ゆたのしむとはなしも
こゝにはるものなく用ひまでもつきず

思ふ我たに、なんぞ人ふ所をたすけあら
ぬやうにも笑ひくまたさらに林を
めぐらす藤ひまてくさもふ舟の
中に松ふりしのゝめ空をも
知らぬ世

昭和三年十一月

岡田起作書

岡田起作先生編書目錄

草海
菊判函入特製
紙數二百八十頁
定價金貳圓
郵稅金十錢

元亨帖
和裝大判
全一冊
定價金七十錢
郵稅金六錢

赤壁帖
和裝大判
全一冊
定價金七十錢
郵稅金六錢

かな帖
和裝大判
全一冊
定價金七十錢
郵稅金六錢

發行所　三成社書店

昭和四年三月二十日印刷
昭和四年三月廿五日發行
定價金七拾錢

不許複製

編書者　岡田起作
發行者　東京府北豐島郡巢鴨町平松壹千壹百九十四番地　小澤寛
印刷者　東京市本所區小泉町貳十八番地　東鄉清人
發行所　東京府北豐島郡巢鴨町平松壹千壹百九十四番地　三成社書店
振替東京四八七八番
印刷所　小倉印刷所

發賣所
東京市本鄉區彌生町三番地　合資會社　文化書房
振替東京二五四七三番

322
117

終